広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	国語の授業でICTをどのように活用するか ： 継続的な活用を通しての目標や課題
Author(s)	吉川, 将弘
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 294 - 300
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054829
Right	
Relation	

国語の授業でICTをどのように活用するか
―継続的な活用を通しての目標や課題―

広島修道大学ひろしま協創高等学校　　吉川　将弘

キーワード：　国語、ICT、Google workspace

1.　初めに

本稿は、2022年度（令和4年度）勤務校で行ったICT を活用した授業の実践報告である。あらかじめ明確な研究目標や課題を設定して行ったものではない。むしろ1年間の実践における気づきから、今後の国語の授業におけるICT活用の目標や課題を考えていこうとするものである。

2.　授業でICTを使用する理由

2.1　ICT活用の理由

私は以前、構造化された板書や対話を重視した授業実践を目指していた。その中で生じた悩みは、指名した生徒以外の意見を聞くことができないことだった。その生徒が多くの生徒が納得できる意見を言った場合、それ以上の広がりが生まれてこないのである（もちろん、生徒の頭の中では起こっているのかもしれない）。そこで他の生徒の意見を聞き出すための方法として、協働的な学習に興味を持った。そのなかで、生徒の意見をより多く集めるためにはICT の活用が必要なのではないかと考えるようになった。Appleやマイクロソフト、そしてGoogleの教育サービスについて学び始めた。結局、協働的な活動に最も親和性を感じた、Googleのサービス（現在のGoogle workspace）を頻繁に使うようになった。このような学びを進める中で、何らかの授業改善に起因して、ICT 活用が生じてくると考えるようになった。現在でも、協働性のある授業展開に、ICTはどのように関係してくるかについて、興味を持って取り組んでいる。

また、私の勤務校では生徒一人1台端末が達成され、全館でWi-Fiが使える状態になっている。加えて私自身がICT活用を推進する立場にいる。しかし、そのことがICTを授業で使用する中心的な理由になっているわけではない。

私は、ある程度の学齢以上（個人的には高校生以上）は、実際の社会との類似性を高めていくべきだと考えている。自分自身の行動を振り返ったとき、手書きで原稿を書くことはほとんどなくなっている。研修会などのメモはパソコンでとる。テレビで記者会見などを見ると、多くの記者はパソコンでメモを取っている。それなのに、なぜ生徒は手書きでノートを取らなければいけないのか。そもそも学校が始まった最初から生徒はノートを取っていたわけではない。手元にある小さな黒板を使っていた時代もあっただろう。ノートがパソコンに代わってはなぜいけないのか（同じような問題意識として、野中（2017）が指摘する原稿用紙問題や、国語の授業等は縦書きでないといけないのかという問題もある）、そのような問題意識があることが、ICT 活用を進めていく理由となっている。

2.2　国語科におけるICT活用について

次に、「国語科におけるICT活用」について、課題に感じていることを述べておきたい。

文部科学省はICTの活用場面として次の10場面を示している。

A 一斉学習

1 教員による教材の提示

B 個別学習

1 個に応じる学習

2 調査活動

3 思考を深める学習

4 表現・制作

5 家庭学習

C 協働学習

1 発表や話合い

2 協働での意見整理
3 協働政策
4 学校の壁を越えた学習

ICT は道具である、ということに異論のある人はいないだろう。ICT を使うために国語の授業があるわけではない。国語の授業に何らかの効果があることを念頭に置いて ICT を使うのである。しかし同時に、ICT によって授業に何らかの変化があることもまた、認めざるを得ない。程度の差はあれ、これまで様々な教育の道具が授業に影響を与えてきたことは間違いない。

従って、ICT の活用が国語の授業にどのような変化をもたらすのか。この視点を準備しておかない限り、「国語科における」活用とは言えないのではないだろうか。現在行われている多くの実践は「国語以外でもできることを国語で実施している」こと、つまり先ほど示した「10 の場面」を「国語の授業で」行っている場合が多いように思われる。もちろん、それが悪いわけではないし、私も同じことをしている。しかしそれだけではいけない、ICT 活用が国語の授業にどのように影響するかを考えながら ICT を活用していることも記しておきたい。

3.　勤務校の ICT 環境について

2022 年度における勤務校の ICT 環境について簡単に述べておく。

平成 31 年に現在の校舎に移転した際に、全館に Wi-Fi が整備され、全普通教室にホワイトボードと短焦点プロジェクタが配置された。生徒端末は 1 人一台。学校が指定した端末を購入していただき、学校で管理している。持ち帰り可能である。２・３年生 iPad・1 年生 Chromebook。両方とも Wi-Fi 機である。教員は Windows PC と iPad を使用している。ラーニングマネジメントシステムとして、Google workspace for education（無償版）を導入。その他「スタディサプリ」（リクルート）を全員使用可能である。

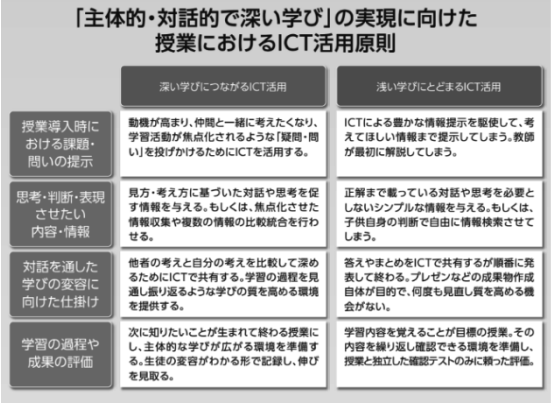
4.　授業を実施したクラス等について

高校 1 年特進クラス。該当クラスは、本校では比較的学力が高い。学習意欲も高く、授業への参加意識もおおむね高い。ペアワークやグループワークも成立しやすい。国語の科目は「現代の国語」2 単位、「言語文化」3 単位、両方とも私が担当している。教科書は「高等学校　現代の国語」（数研出版）「高等学校　言語文化」（同）である。

5.　授業実践

2023 度に実施した、ICT を活用した授業実践について述べる。

整理する方法については、教材・単元ごとに整理する方法、使用した ICT サービスごとに整理する方法、ICT の活用内容ごとに整理する方法などがあるが、今回は「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業における ICT 活用原則」（益川・NTT 東日本、2017）（以下 ICT 活用原則」と呼ぶ）に従って整理したい。この「ICT 活用原則」は、益川と NTT 東日本とが震災復興支援プロジェクトの一貫で、福島に一人一台端末を導入した学校向けの研修パッケージとして作成したものであるが、授業の目的の側から ICT 活用を整理している点が特徴的である。


「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業におけるICT活用原則

	深い学びにつながるICT活用	浅い学びにとどまるICT活用
授業導入時における課題・問いの提示	動機が高まり、仲間と一緒に考えたくなり、学習活動が焦点化されるような「疑問・問い」を投げかけるためにICTを活用する。	ICTによる豊かな情報提示を駆使して、考えてほしい情報まで提示してしまう。教師が最初に解説してしまう。
思考・判断・表現させたい内容・情報	見方・考え方に基づいた対話や思考を促す情報を与える。もしくは、焦点化させた情報収集や複数の情報の比較統合を行わせる。	正解まで載っている対話や思考を必要としないシンプルな情報を与える。もしくは、子供自身の判断で自由に情報検索させてしまう。
対話を通した学びの変容に向けた仕掛け	他者の考えと自分の考えを比較して深めるためにICTで共有する。学習の過程を見通し振り返るような学びの質を高める環境を提供する。	答えやまとめをICTで共有するが順番に発表して終わる。プレゼンなどの成果物作成自体が目的で、何度も見直し質を高める機会がない。
学習の過程や成果の評価	次に知りたいことが生まれて終わる授業にし、主体的な学びが広がる環境を準備する。生徒の変容がわかる形で記録し、伸びを見取る。	学習内容を覚えることが目標の授業。その内容を繰り返し確認できる環境を準備し、授業と独立した確認テストのみに頼った評価。

5.1　授業導入時における課題・問いの提示

（動機が高まり、仲間と一緒に考えたくなり、学習活動が焦点化されるような「疑問・問い」を投げかけるために ICT を活用する。）

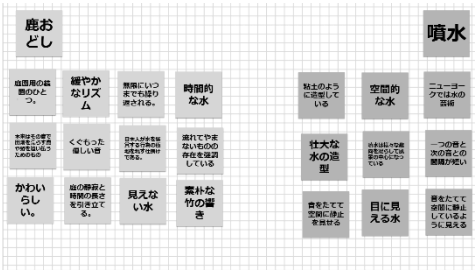
〇キーワード整理（Jamboard による）

本文の基本的なキーワードを整理させることで、本文理解のスタートの準備をさせる。例えば、「水の東西」（山崎正和）や「時間と自由の関係について」（内山節）のように二つの考え方や概念が比較されている文章では、本文を参考にしながらキーワードを二つに分けて整理させる。その際、Jamboard の付箋機能を利用すると、目的とする活動を平易に行わせることができる。

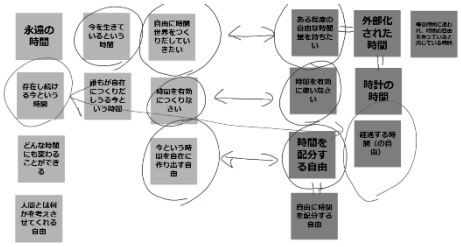
年度当初に行った「水の東西」の場合は付箋を整理するだけであったが、年度終盤に行った「時間と

自由の関係について」では、教員が対立した語彙について簡単に話しただけで、矢印を書き入れる生徒が出てきた。

「水の東西」ワークシート



「時間と自由の関係について」ワークシート
生徒が自発的に書き足した矢印がある



○事前体験レポート（Google スライド）

「絵を前に思考を巡らす」（椹木野衣）は、絵を鑑賞する時には、事前の知識は不要であり、感じたことをありのままにうけいれ、まとまらない思考のままでいることが大切だという文章である。この教材を学ぶ前に、自分たちがどのように絵を見ているかを体験させるため、好きな絵を一つ示し、それについて、なぜ好きなのか、何を知っているかを事前に Google スライドで作製させ、共有させた。共同編集機能を用いると、作製途中に友だちのものを見ることができてしまうが、完成するまで友だちのものが見られないよう技術的な工夫を行った。最後に、ほんとうに事前知識なしで絵を見ることができるかというレポートにつながるようにした。

「絵を前に思いをめぐらす」事前課題
※絵については省略

私が好きな絵はアルフォンス・ミュシャが描いた「ヒヤシンス姫」という絵です。この絵はバレエの宣伝用ポスターに描かれた絵で、この絵に描かれている女性はチェコの女優です。アール・ヌーヴォーという装飾様式が使われています。私がこの絵で特に好きなところは、描画がとても繊細なところと、魅力的な顔となめらかな手です。そして、デザインも好きです。基本寒色で描かれている中で、冠の花が赤という目立つ暖色で描かれているところに惹きつけられるような魅力を感じます。そして、主に曲線で描いているところが、現代の芸術とも共通していると思います。絵画なのに輪郭の線などをはっきり描いているところがとても奇抜ですごくすきです。あとただ単純に顔が好きです。

作品名　夏
作者　ジュゼッペ・アルチンボルド
　　1572年　　油彩/カンヴァス

中学校の美術の授業でこの絵を鑑賞し、
この絵にビビッときたから好き。

この絵の作者が生きた時代は、この絵のようにたくさんの果実、野菜が手に入らなかった。だからこそ、この絵には作者のそのような思いが込められていると思った。

○古文の音読の録画（Chromebook のカメラ）

古文の音読は授業の最初に必ず行うようにしている。判読、相互の読み合いなど形式を変えて行うが、最終的には Chromebook で動画を撮影、提出させている。スムーズに読めることが目標ではあるが、時間制限はせず、小さなミスは気にせず言い直した場合の撮り直しは不要とした。

5.2　思考・判断・表現させたい内容・情報
（見方・考え方に基づいた対話や思考を促す情報を与える。もしくは、焦点化させた情報収集や複数の情報の比較統合を行わせる。）

○助動詞解説動画の作成（Chromebook のスクリーンキャプチャ）

グループごとに助動詞についての解説動画を作成させた。これによって、助動詞で学習すべき 3 つの項目（文法的意味、活用、接続）の概念を理解させるとともに、動画を事前に視聴させることで授業の効率化を図ること、友人の作った動画であることによる動画視聴の動機付けなどを目指した。

まず、教員が見本の動画を作成するとともに、参考にすべき資料（文法書・文法についてのサブノート、スタディサプリの動画、その他 YouTube など）を紹介した。その上で、「脚本」（話す内容）を作製させ、内容に基本的な間違いがないかを確認してから動画作成に進ませた。（この際、間違った内容がなければ可とし、触れていない部分についてはこちらが後で補うことにした。）なお、動画については、小さな言い間違いなどは気にしないこと、編集は不

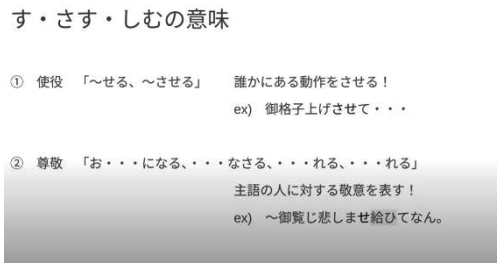
要であることも指示した。動画の完成度を目的としたものではないからである。

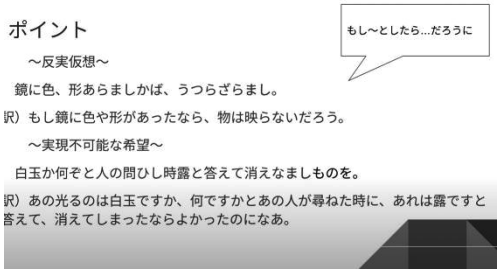
生徒はグループで脚本を作成する際、各資料のどこを見るか、どの内容を掲載するかについて考え、判断しなければならない。大きな間違いについては、机間巡視や、作成中のスライドを確認し指導した。作製途中でも教員側が確認し指導を加えることができることは、Google classroom の大きなポイントである。動画作製には、１時間の撮影時間を設定した。Chromebook のスクリーンキャプチャ機能を紹介し、発表者の顔の表示は自由とした（結局全グループ顔の表示は行わなかった）。

提示する資料は Google スライドを基本としたが、その他のものも許容した。（１グループのみ Google ドキュメントで提示資料を作成した。）資料の作成はグループ内でファイルを共有して行った。これによって相談しながら分担して作業を行うことができた。また、資料を持った生徒が欠席して、作業が滞ることもなかった。

多くのグループはシンプルなものを作製したが、「受身」に柔道の写真をいれるなどのユーモアを示したグループもあった。

生徒が作成した動画の一場面





○文法の勉強（Google フォームのテスト機能）

Google フォームで、自動採点できる用言の選択式確認テストを作製。何度でも解答できるようにした。自発的に繰り返し解答するようにしたかったからである。実際に複数回勉強した生徒が複数いた。

次に、Google フォームによるテストの作成方法を指導し、それぞれ学習した助動詞について問題を作製させた（用言部分は教員が作成）。リンクをドキュメントにコピーし、クラスルームで配信した。

教員側でチェックをしなかったため、幾つか小さな間違いがあったようだが、生徒が互いに指摘しあい、訂正が行われていた。

用言学習用 Google フォーム（教員作成）

5.3　対話を通した学びの変容に向けた仕掛け

（他者の考えと自分の考えを比較して深めたりするために ICT で共有する。学習の過程を見通し振り返るような学びの質を高める環境を提供する。）

○古文の現代語訳の作成（Google スライドによる共同編集）

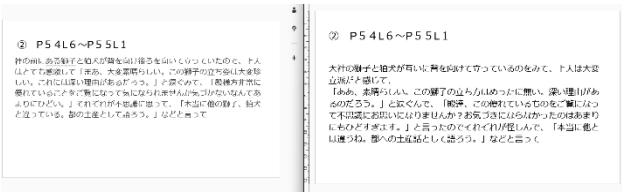
１学期は、ノートに本文を書かせ、訳を作成し、内容について指名しながらまとめる授業を行っていた。ノートは写真に撮って Google classroom で提出させていたが、ICT の活用はあまり行わなかった。

初学者にとっては、本文書き写しは本文と向き合うことになるし、歴史的仮名遣いを確認する場でもあると考えたからであるが、私自身にもノートを使用しないことへの不安があったように思う。

２学期から授業の形式が変化してきた。初めにワークシートを用いて、大まかな内容を確認した。これは精読の前に大まかに内容を読み取ることも必要と考えたからである。その後協働編集で現代語訳を作製することで、内容について議論する時間を多めにとるようにした。なお、ワークシートはGoogleドキュメントで作成、classroom で配信することが多い。

３学期になると、ワークシートを用いて大まかな内容を確認する事は継続しつつ、クラスを２つのグループに分け、それぞれに同じ部分の現代語訳を作製させるようになった。その後、両グループが作成した現代語訳をホワイトボードに投影し、違う部分を指摘させ、どうすべきかを議論させた。単語の意味や文法、文脈などについて、生徒と対話しながら授業を展開した。この際、生徒の意見を入れながら現代語訳を私の手で訂正するつもりでいたのだが、各グループの生徒は私が何も言わないうちに、自発的に訂正を始めた。最終的には、基本的な部分は共通しながらもそれぞれのグループの現代語訳が完成した。さらにこの二つの現代語訳を参考に個人の訳を作成させ、提出させた。ICT を活用して、主体性のある学習ができるようになるのではないかと感じるようになった。

投影した時のイメージ（教材は「丹波に出雲といふ所あり」（徒然草））


② P54L6～P55L1

神のmik.あるを獅子と狛犬が間を保ちながら睨みをきいているので、十人はとても感激して「凄い、大金掛けらしい。この獅子の立ち姿は大変珍しい。これには深い理由があるだろう。」と褒めて、「高橋先生が常に優れていることを多く教えてくれるにならわれませんよ。ごがないなんてあるのだろう。」とそれぞれが感嘆して、「本当に他の獅子、狛犬と違っている。都の土産として持ろう。」などと言って

② P54L6～P55L1

大社の獅子と狛犬が互いに間を保ちながらにらみをきっているのを見て、十人は大変立派だと感じて、
「ああ、本当らしい、この獅子の立ち方はめったに無い、深い理由があるのだろう。」と言ってそれぞれが感嘆して、「絶対、この他にないものをご覧になって不思議に思はいになりませんか？お気づきにならないかったのはあまりにもひどすぎます。」と言ったのでそれぞれが怪しんで、「本当に他とは違うね。都への土産話として持ろう。」などと言って

○学校辞書作り（Jamboard でアイデア出し　スプレッドシートで協同編集・相互評価）

「舟を編む」（三浦しをん）の授業を受け、学校についての辞書を作成するという活動を設定した。

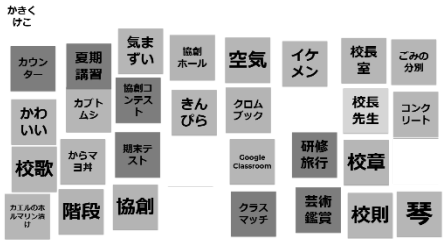
まず、辞書に記載すべき語彙を Jamboard に書き出させ、それをもとにグループごとにスプレッドシートに見出し語の意味・説明を作製させた。さらに、それについて、指定した項目について別グループによる評価を行わせ、それを参考にリライトさせた。

こちらとしては、次第に主体的に書き換えができる生徒が登場していたので、活発な書き換えが生じることを期待したが、期待ほど活発にならなかった。

原因として、授業は２学期に行ったが、辞書の作成が３学期になり、教材で学んだ「血の通った辞書」の条件などが（一応振り返りはしたが）忘れられてしまったこと、生徒間の批評はやはり遠慮があることなどがあげられるだろう。

最終的には内容を整理し、電子ブック化して生徒に渡したいと考えている。

語彙の書き出し（奇妙は語彙もあるが、書き出しの時点では許容している）



意味の記述と他グループによる１次評価

見出し語の読み	見出し語	品詞	説明	文例	文写真	A~C	A~C	A~C	A~C
いーるーむ	eルーム	名詞	朝時間に使っている教室。ALTの先生がイベントを開催する教室。			A	B	A	B
いす	椅子	名詞	場所によって違う所。キャスターがついてあるものなど様々な種類の椅子がある。			A	A	A	A
いどうせんせい	伊藤先生（3A）	固有名詞	先生の苗字の中で、1番多い名字。事務室の入り口をのぞくと、自席には「伊藤」がいる。			A	A	A	A
きますい	気ますい	形容詞	人とんこの間でこうお言えないような空気感になること。			A	B	B	A
きょうそうこんてすと	協創コンテスト	名詞	毎年秋頃に行われる。文学的な発表会的な生徒で行う。組織単位がある。			A	A	A	B
きんぴら	きんぴら	名詞	1年1組のとある生徒の好きな食べ物。			B	B	B	A
きまつてすと	期末テスト	名詞	毎年期末に行われる定期試験。			A	B	B	C

5.4　学習の過程や成績の評価

（次に知りたいことが生まれて終わる授業にし、主体的な学びが広がる環境を整備する。生徒の変容が分かる形で記録し、伸びを見取る。）

○読書の記録（スプレッドシート）

これは国語科全体で行っていることだが、スプレッドシートによる読書の記録を行っている。Google クラスルームの「課題」機能で、配信と返却を繰り返すことで、やり取りをしている。年度をまたいで使用できるようにしており、過去に自分の読んだ本を振り返ることができるようにしてある。

○評価（ルーブリック）

「ルーブリック」を活用したパフォーマンス評価にも取り組んだ。一回は「水の東西」で文化論を作成させた際、Google クラスルームにある「ルーブリック機能」を活用した。「指定の行数」「対象物の取り上げ」「比較」「原因・理由の類推」を評価項目とした。もう一回は「絵を前に思いをめぐらす」で小論文を書かせた際に、紙媒体のルーブリックによる生徒の相互評価を行った。ただ、ルーブリックについてはまだまだ勉強が必要なことを思い知らされただけになった。

定量的に判断できるものはいいが、質の違う評価点を一人で作ることは難しい。また、生徒相互に評価させるとどうしても甘い評価になってしまう。どちらも、繰り返すことで成熟していく課題のように感じている。

Google classroom のルーブリック機能

正直なところ、評価については十分に実践できていない。評価・評定については、学校全体としての規定などもあり、まだまだ議論や工夫が必要である。

6. まとめ

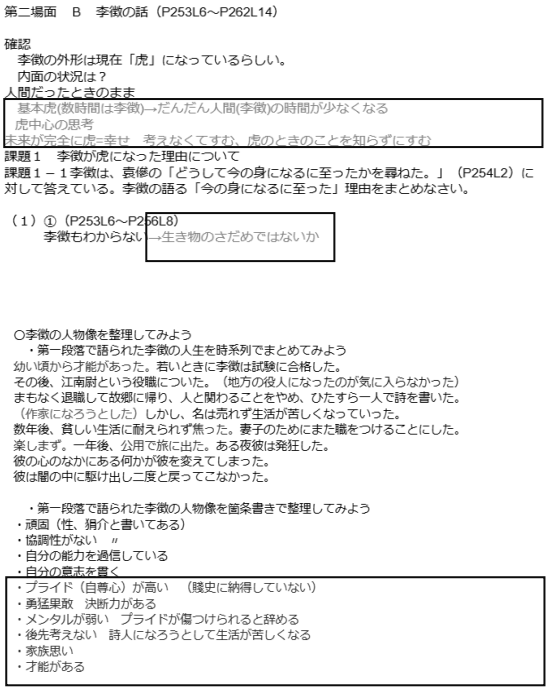
今回の実践を通して、次のようなことを考えることができた。

一つは、協働的な学びは必ずしも ICT の画面の中で発生しなくてもよいということである。ICT で作製したものを中心に置いて議論し、それを受けて訂正加筆することも協働的な学びと言える。

Google フォームによる古典文法の小テストやグループごとの古文現代語訳などの方が協働的であり、こちらが意図的に ICT で協働性のある活動を仕組んだ辞書作りではうまく協働的な学びが発生していなかった。

もう一つは、ICT のリライトしやすさが、国語の授業にとって効果のあるものになる可能性があるということである。つまり、確定した黒板を写す、自分なりの意見を書き出すことを躊躇すると言ったことを減らせる可能性がある。国語のように、ある一定の範囲内の生徒の解答を許容する可能性のある教科では、このような道具は有益と考えられる。実際、年度末期の生徒たちのワークシートを見ると、一定の方向性を持ちながら、他人の意見については色を変えるなどの工夫をしてまとめている様子を見ることができる（白黒の写真ではわかりにくいが、自分で整理したものに加筆したことがわかる　※四角で囲んだ部分）。この点については、石丸（2022）も指摘しているように予想される点ではあるが、ICT 活用の成果として積極的に評価すべきだと考える。

生徒が作成したワークシート（「山月記」（中島敦）李徴の前半生をまとめ、人物像を考えるワーク）


第二場面　B　李徴の話（P253L6～P262L14）

確認
　李徴の外形は現在「虎」になっているらしい。
　内面の状況は？
人間だったときのまま
　基本虎(数時間は李徴)→だんだん人間(李徴)の時間が少なくなる
　虎中心の思考
未来が完全に虎=幸せ　考えなくてすむ、虎のときのことを知らずにすむ
課題１　李徴が虎になった理由について
課題１－１李徴は、袁傪の「どうして今の身になるに至ったかを尋ねた。」（P254L2）に対して答えている。李徴の語る「今の身になるに至った」理由をまとめなさい。

（1）①（P253L6～P256L8）
　　李徴もわからない→生き物のさだめではないか

○李徴の人物像を整理してみよう
　・第一段落で語られた李徴の人生を時系列でまとめてみよう
幼い頃から才能があった。若いときに李徴は試験に合格した。
その後、江南尉という役職についた。（地方の役人になったのが気に入らなかった）
まもなく退職して故郷に帰り、人と関わることをやめ、ひたすら一人で詩を書いた。
（作家になろうとした）しかし、名は売れず生活が苦しくなっていった。
数年後、貧しい生活に耐えられず焦った。妻子のためにまた職をつけることにした。
楽しまず。一年後、公用で旅に出た。ある夜彼は発狂した。
彼の心のなかにある何かが彼を変えてしまった。
彼は闇の中に駆け出し二度と戻ってこなかった。

　・第一段落で語られた李徴の人物像を箇条書きで整理してみよう
・頑固（性、狷介と書いてある）
・協調性がない　〃
・自分の能力を過信している
・自分の意志を貫く
・プライド（自尊心）が高い　（臆史に納得していない）
・勇猛果敢　決断力がある
・メンタルが弱い　プライドが傷つけられると辞める
・後先考えない　詩人になろうとして生活が苦しくなる
・家族思い
・才能がある

ただ、年度当初にはこのような行動が見られなかったことに注意する必要がある。これは教員側と生徒側にそれぞれ要因があると思われるが、いずれにしても、生徒がすぐに自立的に行動できるわけではないことを念頭に置いて ICT 活用を準備する必要があるだろう。

加えて、生徒が作成している「ワークシート」を容易に確認できることも重要である。Google classroom の課題機能は生徒が「提出」しなくても、状況を確認できる。授業終了後に生徒それぞれの記述を確認し、次の時間の計画を立てられることは、

国語のように生徒の意見を受けながら展開していく授業では大きなポイントであると感じた。この点は日々の形成的評価にも使用できると考えられる。

一方で、生徒に本質的な意味での自立性を与えたという実感はない。確かに、教員が話す部分は少なくなったが、結局教員側の想定を飛び出す場面はそれほど多くならなかった。これについては今後の課題と考えている。

7. 終わりに

ICT 活用の活用段階を測る指標として、「SAMR モデル」（Puentedura,2010）が知られている。

Substitution（代替）
Augmentation（増強）
Modification（変容）
Redefinition（再定義）

の頭文字をとったものである。

この一年間の実践がどのレベルにあるかと問われれば、せいぜい「変容」の端緒についたレベルであろう。決して十分なものではないし、革新的なものもない。使わなくても困らないものかもしれない。

しかしながら、私たちは ICT を無視することはできない。普段、私たちは教育が生徒と教員で成り立ていると思いがちだ。しかし、実は教育には「教育にかかわる道具」が介在している。教科書やノート、黒板がそうである。ICT がそこに加わったのである。私は、前述のように道具が変わると何らかの形で授業に影響が出ると考えている。ICT がどのように授業に影響を与えるのかはまだ明らかではない。出ないのかもしれない。出てもわからないのかもしれない。しかし、ICT がそこにあり、おそらく生徒たちが使い続けていく道具である以上、教師もそこに触れていかなくてはならないものなのではないだろうか。

注　本稿は広島県私学協会主催「令和４年度 ICT 活用推進事業第２回研修会」（於広島ガーデンパレス）で事例共有させていただいた内容を元に考察したものである。

【引用・参考文献】

益川弘如・NTT 東日本ビジネス＆オフィス営業推進本部教育 ICT イノベーションプロジェクト(2017)「次期学習指導要領に対応した授業実践ハンドブック」
Ruben R. Puentedura(2010)「SAMR and TPCK: Intro to Advanced Practice」
文部科学省生涯政策局情報教育課「ICT を活用した指導方法（１人１台の情報端末・電子黒板・無線 LAN 等）～学びのイノベーション事業実証研究報告書より～」
野中潤(2017)「教育 ICT と国語教育学の課題（１）」都留文科大学教育紀要　第 85 集
野中潤編著(2019)「学びの質を高める！　ICT で変える国語授業　－基礎スキル＆活用ガイドブック－」　明治図書
野中潤編著(2021)「学びの質を高める！　ICT で変える国語授業②　－応用スキル＆実践事例集－」明治図書
野中潤他編著(2022)「学びの質を高める！　ICT で変える国語授業③　Google workspace for education 編」　明治図書
石丸憲一編著(2022)「Chromebook でつくる中学校国語の授業」　明治図書
稲垣忠編著(2022)「教育の方法と技術 Ver.2　ID と ICT でつくる主体的・対話的で深い学び」　北大路書房
イーディーエル株式会社監修(2021)「小学校・中学校 Google workspace for education で創る１０Ｘ授業のすべて」　東洋館出版社
「教育科学　国語教育　特集 ICT で実現する『個別最適な学び』と『協働的な学び』2023　３月号 No.879」明治図書